

moon



MOON HOTELS MAGAZINE
Vol. 5
2015
Winter

D. Saya

Travel over The ocean

Maritime culture portrayed by two canoes

二つの船が伝える海洋文化

私たちが旅へ出る時にワクワクするのは、
太古の昔から海原を越えて旅をしてきた海洋民族の
遠い記憶が、DNAに宿っているからなのかもしれない。

写真提供：門田 修、the Polynesian Voyaging Society and 'O'iwi TV
撮影協力：国営沖縄記念公園・海洋文化館

「南の島へ旅をする」というと、飛行機を思い浮かべる人は多いだろう。ただ、歴史を振り返ると、それはここ何十年かのこと。人類は長い間、船で旅をしてきた。

クックやマゼランが太平洋の島々を「発見」するよりもはるか昔から、人は海を旅してきた。紀元前3千年頃、中国南部からミクロネシア、ポリネシアへ人類が移動を開始。当初はイカダのような粗末な船に、土器や家畜を積み、島伝いに旅をしたと考えられるが、何千年という時を経て、造船技術も航海術も進歩した。

ポリネシアの島々から、ハワイには8～10世紀頃、イースター島には10世紀初頭、ニュージーランドには11世紀頃までに人々が到達したとされる。ハワイ、イースター島、ニュージーランドを結ぶ一辺約8千キロメートルの三角形はポリネシア・トライアングルと呼ばれ、この地域には言葉や食文化など共通する要素は多い。その一つが、自分たちの祖先は遠く離れた「ハヴァイイキ」から来たという伝承。ハワイの創世神話クムリポでは、ハワイの王家の先祖はタヒチから来たとされる。また、島々に残るペトログリフという岩絵には、動物と共に大きな双胴船が描かれている。だが長い間、古代ポリネシア人の航海は伝説として片付けられてきた。

1960年代以降、各地域が植民地からの独立を模索する中で、伝統文化やアイデンティティを見直す動きが起きた。この「アイラント・ルネッサンス」とも言えるムーブメントを後押し



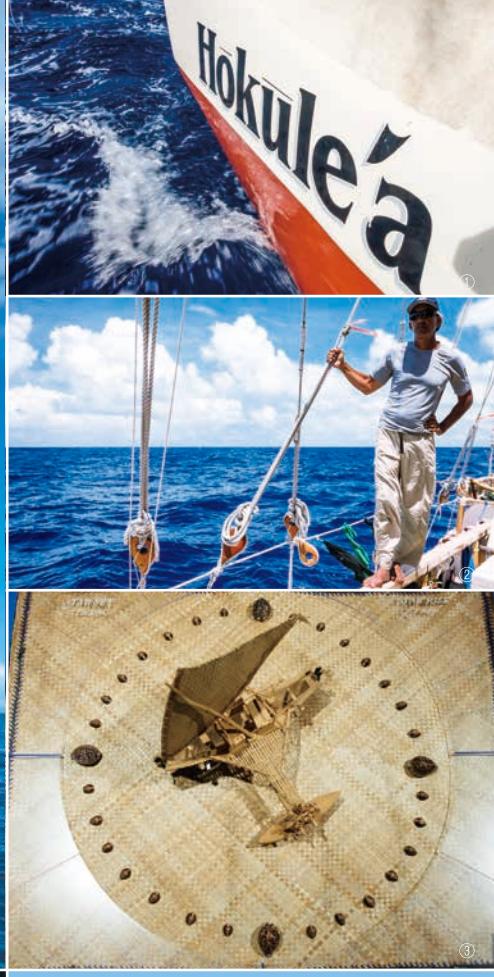
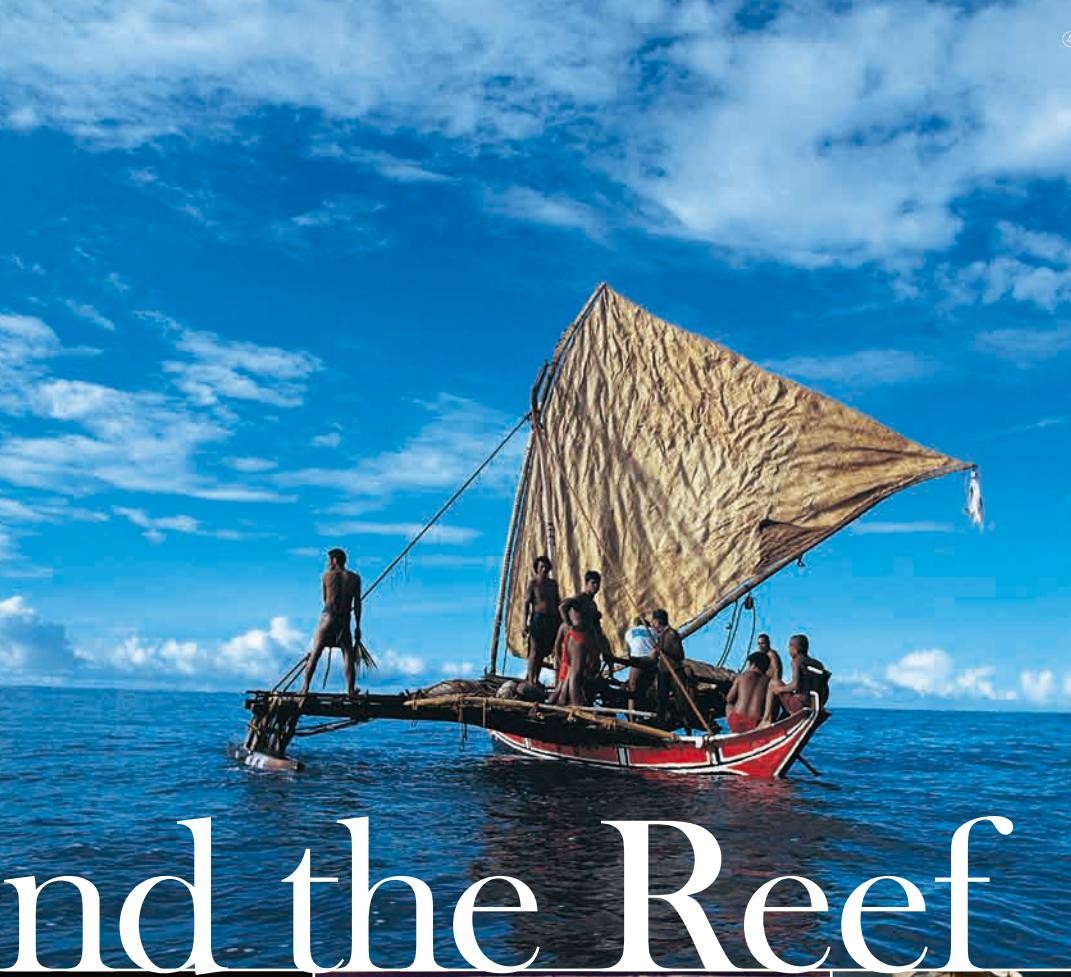
したのが、1975年にハワイで建造された木造ダブルカヌーのホクレアだ。翌年、ホクレアは、風の力と人間の知恵を頼りにハワイとタヒチの間を往復。実はボリネシアではすでに伝統航海術は失われていたのだが、ミクロネシアのサタワル島の航海士がこれをホクレアのクルーに伝授。太平洋海域の伝統航海術による大移動が、技術的に可能だと証明して見せた。

羅針盤も世界地図も持たない先人が大海原を航海できたのは、この伝統航海術があったからだ。方位を知るのに夜空の星を使うため、スター・ナビゲーションとも呼ばれる。また、海面のうねりを読む、鳥などの習性や漂流物、雲の形から島の位置を知るという知恵も蓄積されている。

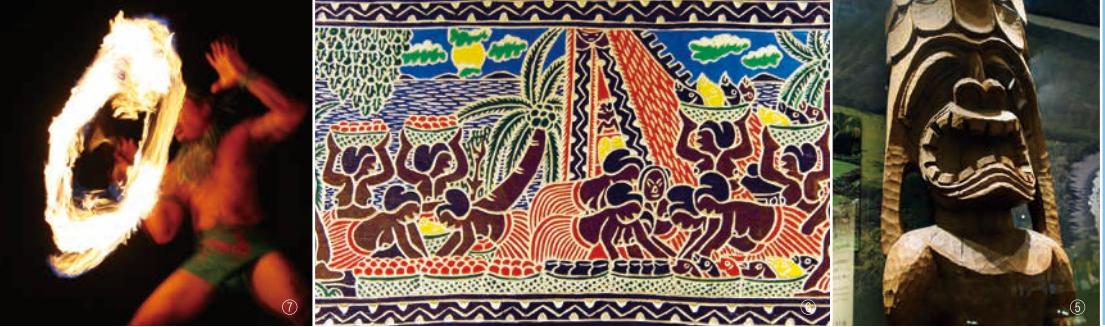
一方、ホクレアが生まれた1975年、そのサタワル島から、外洋の荒波を越えるのに適したフロートをつけた、アウトリガータイプの木造船カヌーが航海に出た。名前はチエチエメニ。クルーは47日間をかけて伝統航海術で3千キロを渡り、沖縄国際海洋博覧会会場へと到着した。以来40年間、海の民の誇りを示す船として大阪の国立民族学博物館に展示されている。

ホクレアは現在も航海をしている。2007年には沖縄にも来航しOne Ocean, One People（海は一つ、人々も一つ）というメッセージを残した。1975年から現在まで、対照的な運命をたどった二艘のカヌー。その存在は、島と島とは海でつながっているというアイランド・カルチャーやの原点を教えてくれる。

*ハヴァイイキ…「とこしえの地」といった意味合いの言葉で、島によってハワイキ、アヴァイキ、ハヴァイイなど発音が異なる。



nd the Reef



①波を切って進むホクレア。②ホクレアのナビゲーター、ナイノア・トンプソン。③星の位置で正確な方角を知るスターナビゲーションのコンパス。

④サタワル島から沖縄本島へと旅をしたチエチエメニ。⑤ある集団が特定の動植物を信仰するトーテミズムは、ポリネシアでも見られる現象。柱への彫刻はその象徴。⑥島々に共通する染めの技術。⑦勇壮なファイアダンス。

GO ON A TRIP TO EXPERIENCE THE ISLAND CULTURE

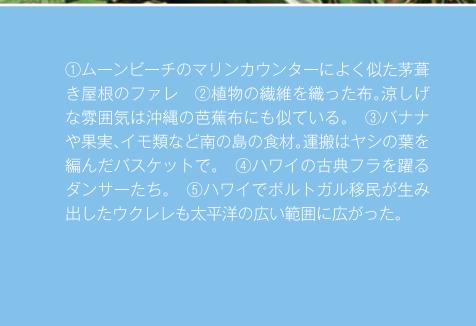
アイランド・カルチャーを感じる旅へ

海を渡り、旅をした古(いにしえ)の人々が運んだのは、食、歌、踊り、伝説、島に根付く文化そのものだ。

その一つが、言葉。言語学の世界から見れば、太平洋の島々に広がる千以上の言葉はオーストロネシア諸語に分類される。元をたどれば同じ祖語という、親戚のような関係だ。アウトリガーカヌーの分布は、ほぼこのオーストロネシア諸語の分布と重なる。危険を伴う航海へ乗り出した原動力は、冒險心か、勇気か、あるいは人間の本能だったのか。

文字を持たなかつた海の民は、チャント(詠唱歌)と踊りで自分たちの伝説や造船術などを伝えてきた。神々への祈りもまた、歌と踊りで表現され、伝えられてきた。ハワイでカヒコと呼ばれる古典フ一面は神話や祈りを現代に伝えている。先述のポリネシア・トライアングルには地域全体に共通する神話がある。島によつて細部は異なるが、マウイという半神半人の大男が空を持ち上げて大地と空とを分離させたり、あまりに早く通りすぎる太陽をつかまえてゆっくり動くことを約束させるあらすじは共通している。また、別の系統の神話として、ドロドロとした混沌の世界をかきまわして島が生まれた話や、男女の神が共にさまざまな島を産む話など、日本の古事記と似たエピソードが環太平洋全域に広がっているのも興味深い。沖縄にもまた、神歌(かみうた)として歌い継がれている古謡がある。沖縄の古謡にも、船が海上を飛ぶように進む様子や、家を建てる様子を描写した歌詞があり、文字が入つてくる前の文化のカタチを連想させる。

はるかな時を経たため、古代人がどのように島々をつないでいたかといふ、交流の詳細はわかっていない部分が多い。ただ、近代まで昔の風習を残していた地域を見れば、先人たちの交易の様子は予想できる。例えば、パプアニューギニアの人々は、ラカトイという大型カヌーで交易をした。ラカトイは今ふうに言えば貨物船。複数のカヌーをつないで台船をつくり、その上



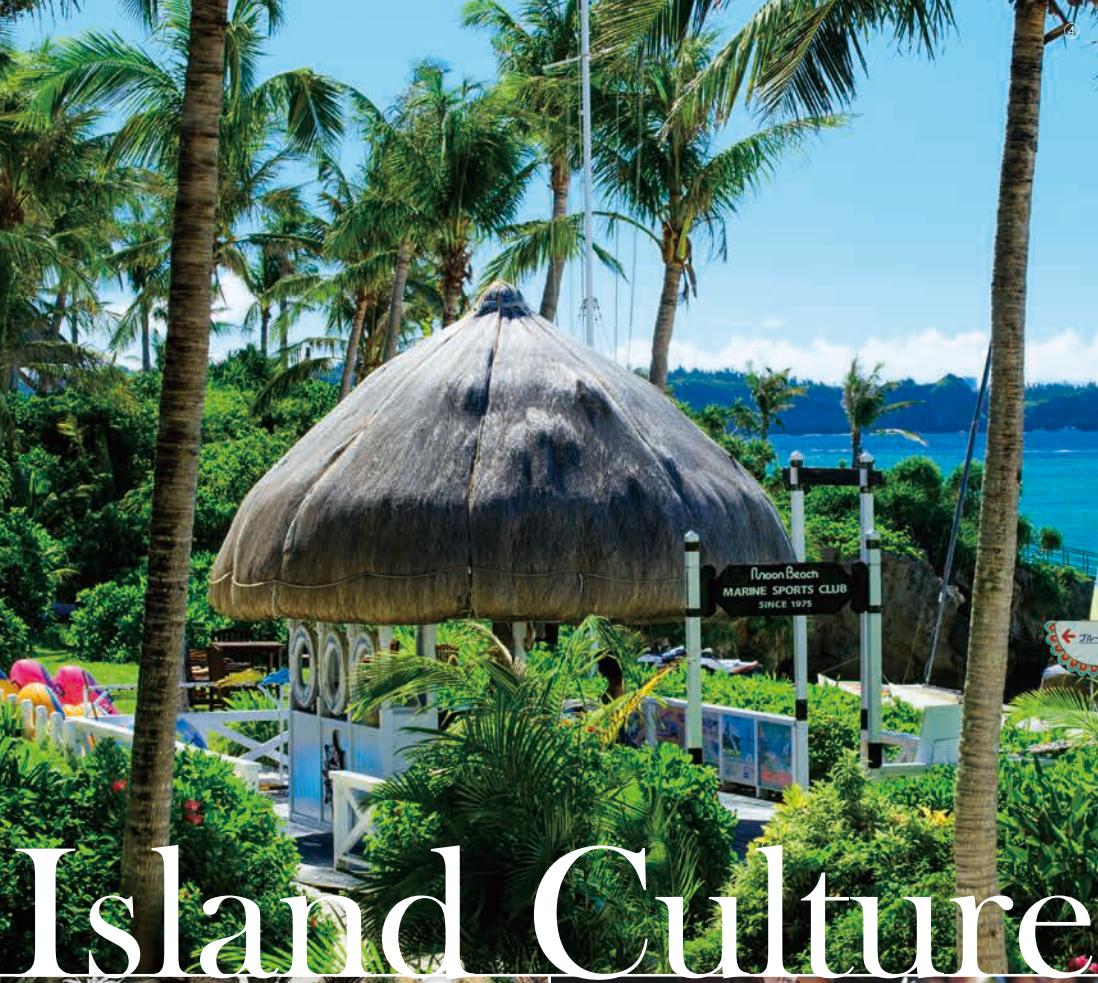
①ムーンビーチのマリンカウンターによく似た茅葺き屋根のファレ ②植物の繊維を織った布、涼しげな雰囲気は沖縄の芭蕉布にも似ている。 ③バナナや果実、イモ類など南の島の食材。運搬はヤシの葉を編んだバスケットで。 ④ハワイの古典フラを踊るダンサーたち。 ⑤ハワイでポルトガル移民が生み出したウクレレも太平洋の広い範囲に広がった。

1975 Bevo

に木材と葉でできたコンテナ状の小屋をつくる。農産物や工芸品などを大量に積み、貝などを貨幣として交易していた。また、同じくパプアニューギニア周辺のトロブリアンド諸島などでは、友好の証として貝製の首飾りや腕輪を交換するクラという儀礼があり、独特な彫刻やタカラガイの装飾が施された儀礼用のクラカヌーで島を往来していた。貝貨を使つた交易はパシフィックリム全体で見られるが、日本でも、沖縄でしか採れないゴホウラ貝の腕輪が、全国各地の弥生時代の遺跡から出土しており、古代から広範囲での交易があつたことがわかる。

ハワイでは、先祖が船に乗せて持つてきましたと伝わる植物を「カヌープランツ」と呼ぶ。タコ芋やヤム芋、さつま芋、バナナ、ココナッツ、ウコンなど、どこの島にもありそうなものだが、植物が人の手によって運ばれたことを示す伝承だ。沖縄でもココナッツは外来種で、自生していたものではない。今、私たちが沖縄と聞いてイメージするパイナップル、マンゴー、グアバなどの果物も、多くは外来種だ。さつま芋など南米原産の植物は、東から西へ、西から東へと行きつ戻りつしながら伝わったことがわかつており、人々が往来を重ねて交易を続けてきたことを意味する。さつま芋は宮古島には16世紀末、沖縄本島には17世紀初頭に伝わったとされ、琉球から薩摩を通して日本全体に広がった。食材にも、海を越えてそれらを運んだ先人の勇気と知恵、海でつながる海洋文化の広がりが秘められているのだ。

昔から琉球の人々は、島という環境を海に開かれたグローバルな視野で捉えてきた。パシフィックリムの一員である沖縄を実感し、海洋文化に触れる日本で唯一の資料館「海洋文化館」が沖縄美ら海水族館に隣接しているのをご存じだろうか？ 次回ムーンビーチに滞在する際に訪ねてみてはいかがだろう。木造船の実物をはじめ、伝統航海術や造船技術の紹介、島々の音楽や装い、食そして沖縄の海人文化など、グローバルな海洋文



FRAGMENTS OF ISLAND CULTURE AT MOONBEACH

ムーンビーチに宿る アイランド・カルチャーのかけらたち

①ムーンビーチではフルーツをはじめとする島の食材を旬に合わせて使用 ②ココナツミルクの効いたホテルオリジナル料理 ③ムーンビーチオリジナルのビーチサンダルはショップ「コナ」で販売中 ④開放感でいっぱいのマリンカウンターは南国そのもの ⑤ムーンビーチルアウで好評のウクレレ体験教室 ⑥タヒチアンダンスのイベントも開催

太平洋の島々で自らの文化を見直すムーブメントが起きていた1975年、ムーンビーチはオープン。周囲に開かれ、環境に溶け込む低層の建物は、自然と調和する海洋文化のエッセンスを沖縄で初めて取り入れた本格リゾートとして評価された。

「ここで深呼吸をすると、南の島へ帰つて来たようだ」と語るリピーターは多い。そう感じさせるのは亞熱帯の植物に囲まれた風景か、あちこちにあるアイランドカルチャーのかけらだろうか。

ミクロネシア地域のサモアやトンガには、柱と屋根だけで造られたファレと呼ばれる東屋のような集会所がある。カヤ葺き屋根が印象的なムーンビーチのマリンカウンターは、南の島の東屋そのものだ。実はこの屋根を葺くのも、あちこちにある木彫りのアイテムも、アイランド・カルチャーをリスペクトするムーンビーチのマリンスタッフによるもの。海の青、ガーデンの緑、色とりどりの花に囲まれたムーンビーチでは、ウクレレやフラ、タヒチアンダンスなどのアイランド・カルチャーを体感できるイベントも開催している。

碧色の海を眺めれば、波間から吹く海風が船旅へと誘う。ムーンビーチの桟橋からプライベートアイランドのナップ島へ渡れば、南国の濃密でゆったりとした時間に包まれる。そんなナップ島の島影には、太平洋に広く伝わる民話が似合う。あらすじはこうだ。ある日、お腹をすかせた大男が神さまに釣り針をもらい、釣りに出かけた。何とかひつかつたので力いっぱい引っ張り上げると、それは大地で、島ができたという。ナップ島もそんな風にしてできたのかと思えるほど、島の風はゆつたりとそよぎ、私たちのほほを撫でる。

島の暮らしは海と共に。パシフィックリム全体に共通する文化の一つに、豊漁や航海安全の祈りがある。沖縄では、港町



①恩納村前兼久漁港で開催されるハーリー競技 ②1975年オープン当時のカタマランヨットで上陸したナップ島 ③マリンカウンターの看板、南の島を意識したデザイン ④ヤシの葉擦れの音で、風が渡ってくる様子がわかる ⑤マリンスタッフ特製のトーテムポール ⑥ムーンビーチの美しいサンセットを示す太陽のシンボル ⑦ダイナミックなファイヤーダンスを楽しめるプランやイベントも開催



で旧暦5月4日に行われる爬龍船競技(ハーリー)が盛んだ。神に祈りを捧げ、奉納のハーリー競技を行う。ムーンビーチの地元・前兼久漁港でのハーリーには毎年マリンスタッフのチームが出場、連続優勝を飾っている。前兼久ハーリーでは木造の伝統漁船サバニ一隻に11人が乗り込み、鉤の音に合わせて櫂でサバニを漕ぎ、速さを競う。海の恩恵を受けてきた人々の、自然への感謝と畏敬の念が表れた行事だ。

沖縄の文化と言えば琉球王朝のイメージが強いのだが、人々の感覚の奥深くには、もっと広い意味で海の民に共通する感覚が息づいている。

朝、太陽が出るでしょう。沖縄のおばあちゃんは『今日も家族が無事に過ごせますように』と手を合わせます。ハワイも同じで、太陽の恵みに感謝するチャンントを歌つたりするんですよ」とは、7ページに登場する大田エコさんだ。それは、自然に感謝して生きるアイランド・フィーリング。エコさんは2007年、ホクレアがハワイからサタワル島とヤップ島を経由して日本へと向かう旅の途中、沖縄本島南部の糸満へ入港した際に歓迎のチャントを謡い、弟子たちがフコラを踊った。

「王さまの船を歓迎するチャントを謡いました。陸から弟子の一人がホラ貝を吹いたら、ホクレアからも返礼のホラ貝が聞こえて…感動しましたね」

それは、船・ひと・島がひとつになつた瞬間。ホクレア歓迎のセレモニーは、温かいアイランド・フィーリングにあふれたものとなつた。

太平洋の島の一つに、いま、自分がいる。水平線は、海を旅した海洋民族の記憶につながつてゐるのだろう。だから私たちは海を眺めることに飽きず、不思議な安らぎを感じるのかもしれない。

An Island Culture Legend

アンクル・ジョージも滞在したムーンビーチは、私にとって、本当に思い出深い場所。

MoonBeach, where Uncle George stayed, is a deeply unforgettable place for me.



大田エコ

ハラウ・フラ・カラカウアを主宰するクムフラ。ハワイアンネームはエコ・マエマエカブラオカハラ・オータ。10代からサーフィンを始め、沖縄初のサーフショップ「カラカウア」をオープンしたサーファーの草分け。日本サーフィン協会の沖縄支部も立ち上げ、ビーチカルチャーの伝道師的役割を果たした。1990年よりジョージ・ナオベ氏に師事し、2000年に沖縄初のクムフラに。ハラウ・フラ・カラカウアは沖縄で唯一、ジョージ・ナオベ直伝のカヒコ(伝統的な古典フラ)を継承するハラウ(フラスクール)。

「子どもの頃、自分はハワイアンだと思っていました」

沖縄初のクムフラ、大田エコさんはそう言って笑った。父親が米軍の建築関係の仕事をしていた関係で、幼い頃から沖縄在住のハワイアンたちと家族ぐるみのつきあいがあったという。

「ムーンビーチができる前、月の浜海水浴場の時代から、彼らと毎週のように遊びに来っていました」

ハワイアンたちと共に遊び、育ったエコさんにとって、海とハワイは身近な存在だ。1990年から伝説的なマスター・クムフラであるジョージ・ナオベ氏に師事。2000年にクムフラの証書を授かった。フラを教える先生は多いが、クムの称号を持つ人は限られている。クムはハワイ文化に精通した人にだけ与えられる特別な称号だ。エコさんはハワイ方式を踏襲し、レッスン前には弟子たちと共にハワイ語のチャントを唱え、神に祈りを捧げる。打楽器やウクレレを奏で、自らが歌うのもハワイと同じだ。

「ハラウとしても、ハワイのフラ大会に二十数回出場しました。実はアンクル・ジョージは沖縄が好きで、多い時で年に7~8回来て指導をしてくれたんですよ」

レジェンドは、2003年にはムーンビーチに滞在した。

「バーで居合わせた方々に『おじいちゃんステキ!』と拍手されて、気を良くした彼が『あちらの皆さんに』と20何人分もカクテルを注文したこと(笑)。滞在中はお部屋でのんびりしたり、海を眺めたり。レストランから海を見て『沖縄の海は本当にキレイだね』と言っていました。私自身も若い頃はここでサーフィンやフラの合宿をしましたし、ムーンビーチは思い出深い場所。ここで海を眺めていると、私は海から生まれてきたんじゃないかなと思えるほど」

残念ながらジョージ・ナオベ氏は2009年に亡くなった。沖縄へ来るたび、土に触れながら「僕はハワイから来ました。沖縄の神様、どうぞ受け入れてください」と祈るような謙虚な人物だった。エコさんは今、レジェンドに教わったアイランド・カルチャーを、自らの弟子たちに伝えている。





THE MB GALLERY SPOTLIGHTS OKINAWAN FINE ART

MBギャラリーが注目する沖縄のファインアート

アートワークとキュレーションが
MBギャラリーに生み出した空間には、
インスタレーションにも似た高揚感がある。

2015年夏、MBギャラリーではファインアートに着目した「沖縄現代彫刻6人展」を開催。アートディレクターの角敏郎は「沖縄で活動している立体アートの作家さんを応援したいという狙いもありました」と企画の背景を語る。

ギャラリーへ入るとすぐに目にに入ったのは、能勢裕子さんの作品。能勢さんは神奈川県生まれで、1980年に沖縄へ移住。毎年、東京の新国立美術館での行動美術展に参加するなど、活動は沖縄県内にとどまらない。「今回の作品はスチールラックの支柱として使われるアングルを組み上げ、タイトルは『frame of frames』。複数のフレームが重なってひとつの作品となったものです」と語る。額縁(フレーム)という枠に嵌(は)められない三次元の立体アートが額縁(フレーム)で表現され、見る側の固定観念という枠(フレーム)も問われているかのようだ。

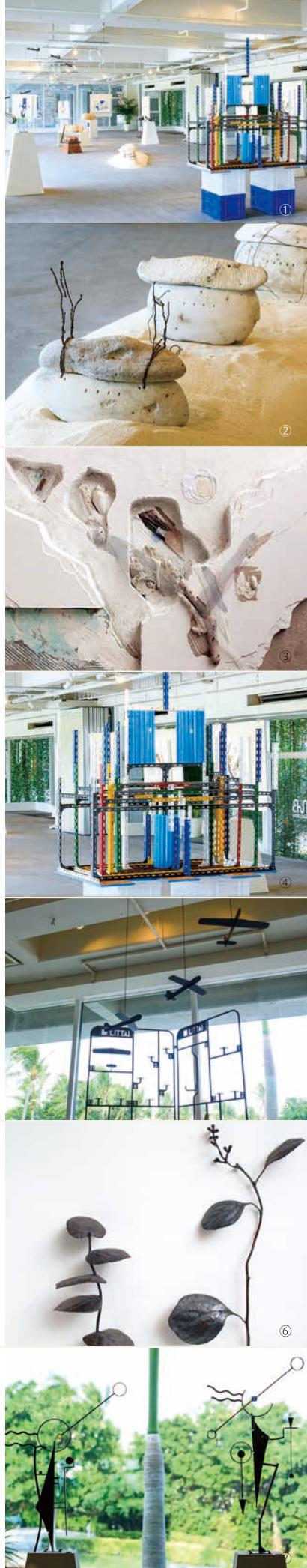
沖縄生まれの仲地研二さんは、普段は板金などを扱う“鉄職人”でもある異色の芸術家。LITTAIという工房名で、職人に徹してオーダーメイドのステンレス製品や鉄製品を製作する一方で、純粋な芸術作品も手がける。「今回の作品はプラモデルのパーツをとめる枠であるランナーがモチーフ。用済みになったランナーのフォルムが面白いと思いました」との話には、能勢さん、仲地さん両者の偶発的なリンクが連想される。また、鉄製の飛行機がランナーから羽化したように吊り下げられている点も興味深い。

同じく沖縄出身の平良和宏さんも、普段は石工の仕事で文化財の石垣修復などを手がける一方で、琉球石灰岩やサンゴ石を素材に創作活動をしている。「僕にとって琉球石灰岩やサンゴ石は、子どもの頃から当たり前にある身近な素材。海辺のギャラリーととても相性が良かったので、僕自身にも新鮮で、創作意欲をかきたてられました」と話す。

貝殻やサンゴ石のコラージュ作品を出した鈴木金助さんは、もともと本土で活躍していたアーティストだが、旅の途中で沖縄が気に入り、住み着いてしまった。「以前から海をテーマにした作品を手がけていましたが、沖縄で、サンゴの化石に近いような造形の素晴らしいところにありました。ビーチによって、とれるサンゴ石の種類や形状も違うので、本当に飽きるということはありません」と、美しい海に囲まれた環境から作品が生まれることを語る。

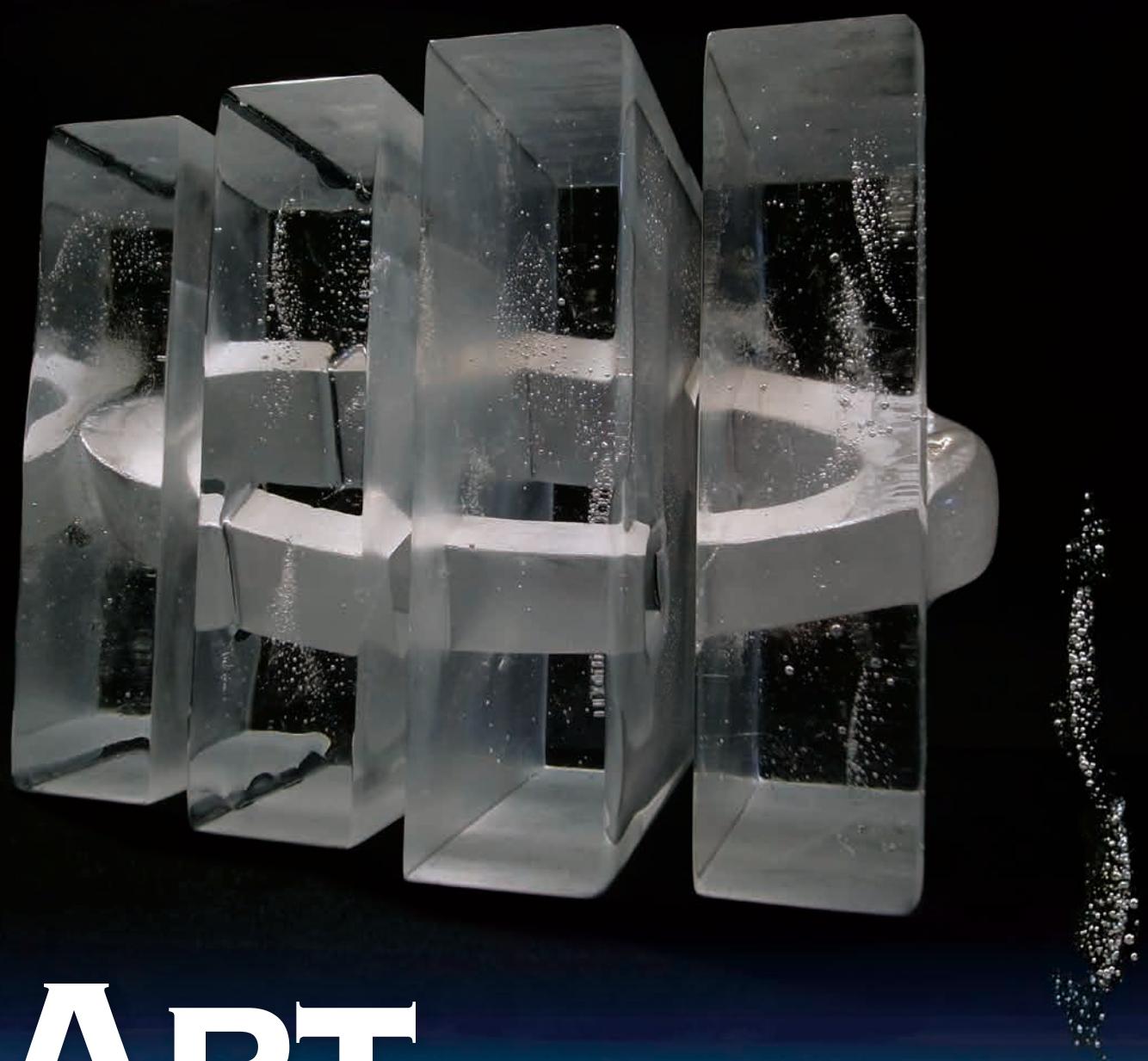
大学進学を機に沖縄へ居を移した福長香織さんは、石彫と金工の両方を手がけるアーティストだ。削っていく石彫に対し、パーツをプラスしていく金工は真逆の表現手法。脳の中でも別のパートが使われるような感覚で、金工が石彫に、石彫が金工に刺激と影響を与える。「工芸にも関心があるので、今後は金工の小さなアートを身に着けるようなアクセサリー類も手がけていきたいですね」との話から、ファインアートと工芸という二つの領域を往来することで開ける新しい地平が楽しみになる。

MBギャラリーが注目する6人の作家、それぞれの今後の展開が楽しみだ。アートディレクターの角は「今後はアジアや環太平洋地域のアートを紹介したり、野外と室内を連動させた展示もやってみたいですね」と次なるステップへの意欲を語った。



①「沖縄現代彫刻6人展」

②平良和宏 ③鈴木金助 ④能勢裕子
⑤仲地研二 ⑥福長香織 ⑦角敏郎



ART OF THE MOON

こころが自然に遊びだす「アート・オブ・ムーン」

季節と共に表情を変えるMBギャラリーの風景。
2015年の夏は現代彫刻家6人展、秋はガラス展、
2016年の春は沖縄ポップアート展を企画中だ。

MBギャラリー Hotel Moon Beach 1F
Open/09:30 Close/20:00

MBギャラリーでは2015年10月から2016年1月11日まで、「旅するガラス パート・ド・ヴェールのガラス作品 2人展」を開催。パート・ド・ヴェールとはメソボタミア文明の時代から続く鋳造ガラスの技法で、今回は県外で注目されている奥野美果、加藤尚子の作品を展示する。ガラスのオブジェから小物やアクセサリーの展示販売も。

第1回 恩納村美ら海花火大会

Fireworks over the
beautiful sea

2015年10月3日(土)

[イベント会場]

星のパレットガーデン、マーメイドガーデン



Service with a Smile vol.4

沖縄本島唯一の 本格的なフラコンペ

The only full-fledged hula competition in Okinawa



総務部 次長
山本 博明



ムーンビーチでは2008年より毎年夏、ハワイアンカルチャーの祭典「ムーンビーチルアウ」を開催しています。きっかけは、東京をはじめ全国各地でフラダンス教室を開いている「メレオハナ・アソシエーション」社長のタラ・ヴェラ氏から、ハワイを彷彿させるムーンビーチのロケーションは素晴らしい、ぜひここでルアウを開催したいという申し出があったからでした。ビーチで躍るという特別な開放感、ホテル全体でハワイアンな体験が楽しめるルアウは、夏のビッグイベントとして人気を博しています。沖縄でもフラダンスを楽しむ方が増えている中、フラ技術のさらなる向上と発展を目的に、昨年初めて本格的なフラの競技大会「マヒナ・オ・ホク フラコンペティション」を開催。マヒナ・オ・ホクとは、ハワイ語で「満月」を意味します。2回目を迎える今年は、県内から15チームが参加。ハワイから著名なクムフラを審査員に招いて、さらにミスアロハフラによる艶やかなスペシャルショーが花を添えました。来年からはエントリーを県内に限らず全国規模へと拡大する予定です。

南国沖縄にも時折涼しい秋の風が吹く頃、ホテルムーンビーチは恩納村主催の「第1回恩納村美ら海花火大会」のメイン会場を提供。地元の方々にも身近なリゾートホテルとして長年親しまれ、気兼ねなく利用できる開放的な雰囲気が魅力のムーンビーチは、星のパレットガーデンとマーメイドガーデンをイベント会場として開放した。ホテルがお店したワンコインで料理が楽しめる屋台には長蛇の列ができ、ステージでは地元アーティストによるライブが催された。夕陽が海に沈み夜の帳が降りると、ホテルの宿泊客や地域の人々で賑わう中、隣接する漁港から4,000発の花火が次々と打ち上げられ、その壮麗さと迫力に歓声があがつた。ビーチやガーデン、テラス席や客室のバルコニーから、思い思いの場所で風に吹かれ笑顔で見上げる花火。自然豊かな海辺のリゾートで間近に眺めることができる、ここにしかない最高のロケーションと贅沢な時間となった。夜空と海面を鮮やかに染める美しい大輪の花火が人々の心を深く魅了した。

Marine Wave

海と踊ろう！

冬でもエンジョイ！ マリンスポーツ

Enjoy Marine Sports even in winter



日本本土が寒い冬を迎える頃も、南国沖縄のムーンビーチでは色々なマリンスポーツが楽しめる！中でもジェット噴射の力で空中を浮遊するフライボードは、近年大ブレイクした人気のアクティビティだ。ムーンビーチでは全日本フライボード大会に出場したマリンスタッフの横江交亮さんが見事チャンピオンに輝き、チネンフミヤさんが7位に入賞！高い実力を誇るスタッフがインストラクターとしてサポートするので初心者でも安心して挑戦してみよう。

Art of Cover

天然色の楽園へ。

Come to a paradise of natural colors.



シルクペインティング作家
太田 久代

今号の表紙では、太陽の光を浴びた亜熱帯の花々や木々など、生命力あふれる植物に彩られたガーデンの風景を描いたシルクペインティング作家の太田久代さん。シルクペインティングとはシルクの上に染料を使って直接絵を描き染色する創作技法で、独特の鮮やかな色が魅力だ。太田さんの作品は、色彩の豊かさと光のグラデーションが印象的で、美しく鮮やかな楽園の世界に引き込まれる。太田さんが描く幻想的な雰囲気を漂わせるムーンビーチの情景で、季刊誌の表紙となった作品以外のものも含め、ポストカードとしてショップで販売。ムーンビーチの想い出に飾ったり、お土産としてプレゼントしたり、旅の想い出を綴って送っても喜ばれそう。



Moon Hot News!

第2回 マヒナ・オ・ホク フラコンペティション

Mahina O Hoku
Hula Festival @ Moon Beach Hotel

2015年10月10日(土)11日(日)
[会場] 2F ティンガーラ



昨年に続き、沖縄本島で唯一の本格的なフラコンペをムーンビーチにて開催！本場ハワイでもトップレベルのクム(指導者)を審査員に招き、県内から出場した15チームが華やかな舞を披露して競い合った。毎年開催予定。

Fun to Eat

食べるのが楽しい！

南の島から ココナツの香り

Scents of Coconut from
the Southern Islands

Lounge & Bar
LANAI ラウンジ・バー ラナイ
Dinner/10:00~22:00
(ラストオーダー21:30)



この秋冬、ムーンビーチのレストランやバーでは、ポリネシアと琉球、海洋文化の出会いをイメージして創作したココナツの料理やカクテルが楽しめる。オールディダイニング「コラーロ」のランチブッフェでは「チキンのカレー風煮込み」をぜひ味わいたい。カレーとココナツの相性は抜群！クリーミー＆スパイシーな味わいは食欲をそそること間違いなし。デザートには「タピオカ入りココナツミルク」をどうぞ。和琉炉端焼「ゆらぎ月」では、会席料理のコースの一品で「ココナツ風煮込み鍋」をご用意。和食にココナツ!?と驚く事なき。豆乳とココナツミルクのスープは上品なまろやかさとコクが絶品。特別会席なのでご予約をお忘れなく。ラウンジバー「ラナイ」では2種類のココナツカクテルをご用意。ココナツリキューとミルク、パッションフルーツなどが入ったショートカクテル。「海のしぶき」をイメージした水色のカクテルは、ウォッカをベースに、ココナツやパイン、マンゴーなど、南国フルーツがトロピカルなハーモニーを奏でる。

Tropical Style

ムーンビーチを想い出に
持って帰ろう！

Take home unforgettable
Moon Beach memories

TROPICAL STYLE
KONA
セレクトショップ・コナ
Open/07:00
Close/22:00
Hotel Moon Beach 1F



ビーチをテーマにしたオリジナルグッズは身に着けるだけで元気120%アップ！セレクトショップ「コナ」に足を踏み入れた瞬間、目に飛び込んでくるのは、鮮やかなデザインのTシャツとカラフルなビーチサンダル。マリーンの象徴である“太陽”や、ハワイアンムードたっぷりのショップロゴなど、ムーンビーチのアイコンをモチーフにした4種類のオリジナルデザインTシャツは、大人用がYL・S・M・Lの4サイズ。キッズ用が90・100・XS・YS・YMの5サイズを用意しているので、親子でもカップルや友達のグループでもお揃いにできるのがうれしい。ビビッドなカラーからパステルカラーまでカラーバリエーションも豊富。湘南発、北谷で大人気のビーチサンダル専門店「げんべい」とコラボレーションしたムーンビーチオリジナルのめずらしい国産のビーチサンダルは、キッズが16・18・21の3サイズ。レディースが23・24・25。メンズが26・27・28の3サイズを揃えている。リゾート気分を盛り上げる南国テイストたっぷりのビーチアイテムは、お土産としてプレゼントしたり素敵な旅の記念にもおすすめ。ムーンビーチだけの想い出を持って帰ろう！

All Day Dining
CORALLO



オールディダイニング・コラーロ
Lunch/11:30~15:00(ラストオーダー14:30)
Dinner/18:00~22:00(ラストオーダー21:30)



中華
料理
店



和琉炉端焼 ゆらぎ月
Dinner/18:00~22:00(ラストオーダー21:30)



Island Oasis... Another Moon Resort



Moon Ocean
GINOWAN
HOTEL & RESIDENCE



もうひとつのムーンリゾート ムーンオーシャン宜野湾ホテル&レジデンス

Moon Ocean Ginowan Hotel and Residence 558-5 Uchidomari Ginowan City, Okinawa Japan 901-2227 Tel:098-890-1110 Fax:098-890-1120



HOW ABOUT AN AMERICAN STYLE DINNER? ENJOY AN ARRAY OF SUCCULENT MEAT CUISINES

肉の旨みがジュワっと広がるアメリカンスタイルのディナーはいかが

ムーンオーシャン宜野湾のレストラン・オーシャングリル自慢のメニューは、何と言ってもボリューム満点ながらホテルメイドの味わいが魅力の肉料理。ゆったり過ごしたい日のディナーにいかが。上質なアンガスビーフ、ボリュームたっぷりのリブステーキ、柔らかくてジューシーなポークスペアリブなど、シェフが厳選したアメリカ産の素材を、ホテルオリジナルのソースで召し上がり。

アンガスビーフのテンダーロイン(写真上:左)／冷めても柔らかい赤身肉を厳選。肉本来の味をしっかり楽しめるよう、ヒマラヤの岩塩を添えて。

スペアリブ(写真上:中)／チャツネを使ってフルーティーに仕上げたオリジナルソースが大好評。骨まわりのコクのある旨みがたまりません。ワイルドに手で持てかぶりついで。

1ポンドリブステーキ(写真上:右)／一人前がなんと1ポンド=460グラム。オープン以来の看板メニューで、オリジナルのステーキソースは酸味と甘みのバランスが絶妙です。

Our pride menu at Moon Ocean Ginowan restaurant "Ocean Grill" is without a doubt our hotel prepared hearty hand selected cuts of beef and other rich and full flavored meat cuisines. Perhaps you like to indulge yourself to a relaxing evening dinner. Quality choicest cut of Angus Beef, hearty Rib Steak, delicate and tender Pork Spare Ribs and more, enjoy America's top choice meats carefully selected by our hotel chef and garnished in our savory original sauce.

Angus Beef Tenderloin (Pictured above left) Hand selected choicest tender red meat sprinkled with Himalayan rock salt. Delicious to the last bite. Spare Ribs (Pictured above center) A favorite menu using chutney to create an original fruity sauce. Savor the rich juice around the bones, be wild and use your hands. One Pound Steak (Pictured above right) Single serving is a satisfying pound = 460 grams. A flagship menu since our opening, enjoy the exquisite symphony of sweet and sour taste in our original sauce.



ALL DAY DINING
OCEAN GRILL
SINCE 2010

- ブレックファーストタイム / 7:00~10:00
- ランチタイム / 11:30~14:00
- ティータイム / 14:00~17:30
- ディナータイム・バータイム / 17:30~23:00
- Breakfast Hours / 7:00 to 10:00
- Lunch Hours / 11:30 to 14:00
- Dinner Hours / 14:00 to 17:30
- Dinner Hours & Bar Hours / 17:30 to 23:00

Local Area Guide

ムーンオーシャン宜野湾 ホテル&レジデンス

周辺ガイド「コンベンションエリア」

コンベンションエリアは、開放的な風が爽やかなアーバンリゾート。多彩な楽しみ方ができます。



冬場も海で遊べます

ホテルの目と鼻の先にある宜野湾マリーナからグラスボートが出港。美しい海の中を、冬場でも楽しめます。サンセットクルーズやナイトクルーズもあるので、詳しくはフロントまで。



コンベンションは徒歩圏内

国際会議からライブまで、さまざまなイベントが開催される沖縄コンベンションセンター。ステイ先にムーンオーシャン宜野湾をお選びいただくゲストも増加中です。



割引券をご用意しました

クルマなら5分、自転車で20分ほどの場所にある天然温泉アロマ。アイランドブリーズを感じながらの露天風呂は最高です。フロントに割引券もございます。



「ちょっとそこまで」に便利

ホテルのサービスの一環として、無料レンタサイクルをご用意しています。数に限りがありますので、まずはフロントまたはベルスタッフにお問い合わせを。



Ocean's Story

オペラとアフタヌーンティーでヨーロッパのような午後を過ごす

目の前にマリーナが広がっているからか、潮風が心地よいからか、どこかアメリカのベイエリアを思わせるムーンオーシャン宜野湾。9月、そのムーンオーシャンでオペラを楽しむイベントがあるという。「ムーンオーシャンでオペラ？」意外な組み合わせに好奇心が刺激されて、参加してみることに。

初めて入るバンケットルームはちょうど手ごろな広さ。何十名かという限定された空間だからこそ、目の前の歌に全身で入り込める。「トゥーランドット」の「誰も寝てはならぬ」、「椿姫」の「乾杯の歌」など、慣れ親しんだ名曲もとても新鮮に感じられた。

休憩時間にオーシャングリルへ移動して、アフタヌーンティーを楽しむという趣向も日本では珍しいかもしれない。いい音楽の合間に、美味しいものを少しつまんで、おしゃべりを楽しむ。大好きだったフィレンツェのサロンを思い出した。オペラの本場イタリアに合わせてティラミスが用意されていたり、ちょっとしたサプライズもうれしい。つい、イタリアワインをオーダーして、ピッツアと一緒に軽く一杯。

ここに来ると、部屋でのんびり過ごすことを最優先していたけれど、たまにはこんなイベントも新鮮。スタッフに聞くと、今後もステキなイベントを計画中だというから楽しみだ。至福の余韻に浸りながらマリーナへ歩くと、地中海にも負けないブルーの海が私を出迎えてくれた。





PROUD TO BE THE FIRST, PROUD TO BE A LEGEND.



1975年、沖縄初の本格的なリゾートとしてホテルムーンビーチが誕生。ポトスの薦が亜熱帯の森のような空間をつくる吹き抜け、その最下階のビーチフロアは、当初長さ400m広さ3000坪の吹きさらしのピロティだった。それは、ガジュマルの木陰のように快適で、海と砂浜の開放感を建物の中に招き入れるかのような自然と融合した風景となった。後に続く沖縄本島西海岸のリゾートホテル建築に影響を与えてきたホテルムーンビーチ。本当の贅沢とは何かを教えてくれる気取りない空間は、今なお独特的の個性を放つLegendとして佇んでいる。



- ホテルムーンビーチ 〒904-0414 沖縄県国頭郡恩納村字前兼久1203番地 TEL.098-965-1020 FAX.098-965-0555 www.moonbeach.co.jp
□ムーンオーシャン宜野湾 ホテル&レジデンス 〒901-2227 沖縄県宜野湾市宇地泊558-8 TEL.098-890-1110 FAX.098-890-1120 www.moonoceaninowan.jp
□東京営業所 〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-7 NBF日比谷ビル11F TEL.03-5512-5277 FAX.03-6203-2271
□大阪営業所 〒530-0057 大阪府大阪市北区曾根崎2-5-10 梅田パシフィックビル5F TEL.06-6948-8890 FAX.06-6948-8891